

# 2009年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量							価 格						
	輸 入			東 京		家計消費 生(ダ)	在 庫	輸 入			東 京		消費支出 生(円)	
	活	化エビ	冷エビ	生車	冷輸入			活	化エビ	冷エビ	生車	冷輸入		
20	0.9	4.2	197.2	0.5	13.1	2,005	73.5	3,944	2,589	928	5,179	1,347	3,628	
21	0.8	3.6	198.3	0.5	12.7	2,112	64.2	3,517	1,732	822	4,446	1,221	3,615	
%	87	85	101	95	97	105	87	89	67	89	86	91	100	
輸 入 国 ( 冷 え び 類 )													単位:千トン	
年	中国	ミ ャ ン マ ー	ベ ト ナ ム	タイ	フ ィ リ ピ ン	ネ ィ ン ド	イ ン ド	グ リ ー ン ラ ン ド	オ ー ス ト ラ リ ア	カ ナ ダ	エ ク ア ド ル	ロ シ ア	ア ル ゼ ン	調 整 品
20	16.8	6.8	42.2	25.0	3.5	37.4	24.0	5.6	2.3	7.7	0.8	7.8	2.6	64.1
21	14.9	6.7	39.9	32.1	3.9	34.8	24.3	6.5	2.0	7.2	0.8	7.1	3.6	41.1
%	89	98	95	129	112	93	101	118	88	94	108	92	137	64

## 輸 入 の 動 向

21年の冷凍エビの輸入量は、19.8万トンでほぼ前年（19.7万トン）並みであった。

一昨年B T、天然ホワイトを抜いて種としてトップにたったバナメイは生産が依然増大しており、世界的にはエビ生産の60%を占めるようになり、小型・中間サイズを含めて主役の座を占めている。

本年は、リーマンショックの影響から欧米の景気回復の遅れやその反動での円高傾向が周年続いたこともあって、本年度の冷凍エビの輸入量の減少傾向が止まった。

冷凍エビ輸入価格は、822円で引続きバナメイの増加もあって前年（928円）を下回って推移し、7年続きで三桁（昨年までは900円台）の価格となった。

21年の為替相場（対ドル）は、前年末の91円から年初は更に円高が進み90円を割る為替円高スタートとなった。前年9月のリーマンブラザーズの破綻を契機に世界的な金融危機の発生の影響を諸に被った格好で円高が進行した。しかし2月以降急激な円高の反動もあって98円まで戻し、その後7月まで95円と相対的に安定して推移した。しかし、その後は再度円高に振れ、11月に86円と大きく円高となったが、年末は92円とやや戻した。

主要輸入国は、引続きベトナムが4万トン（前年4.2万トン）でトップを維持し、次にインドネシア3.5万トン（前年3.7万トン）であったが、両国ともやや減少している。続いてタイが3.2万トン（前年2.5万トン）、インドが2.4万トン（前年2.4万トン）と順位は変わらず、また中国は1.5万トン（前年1.7万トン）と引続き減らしている。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、カナダとグリーンランドがそれぞれ7.2千トン（前年：7.7千トン）、6.5千トン（前年：5.6千トン）とカナダが減少、グリーンランドが増加となった。ロシアは7.1千で前年（7.8千トン）を引続きやや下回った。

また、近年製品需要も若干停滞気味になっている調整品の輸入量は4.1万トンで前年の6.4万トンを下回り、本年も減少傾向が顕著であった。スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等のころも付き関係はタイ2.1万トン（前年：2.1万トン）や、ベトナム9.8千トン（前年：8.9千トン）、インドネ

シア4.4千トン(前年：5.7千トン)、中国6千トン(8千トン)でベトナム以外は各国とも頭打ち若しくは減少傾向が顕著になってきている。

## 在 庫 量

本年の在庫量は、6.4万トンと前年(7.4万トン)を下回った。

本年は輸入量が前年並みであったものの、末端消費は単価安の影響か価格帯の低いバナメイ中心に消費が好調だったことを反映したものである。

本年も例年在庫が増加する7、8月以降、一時的に在庫は多くなったが、周年を通じて特売等も多かったことで消化が進み越年在庫は、6万トンの前半まで減少している。

## 消費地入荷量と価格

21年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1.3万トンで前年(1.3万トン)を若干下回り、依然漸減傾向が続いている。

本年の東京消費地価格は、1,221円で前年(1,347円)をやや下回ったが、輸入価格を反映した格好となった。

本年のエビを巡る特徴は、①本年は周年を通じて為替円高傾向が続き、国内搬入環境が続いたこと、②アジアの産地価格も周年を通じて養殖BT、インドネシア物(16-20サイズ)が12ドル/kgを記録することなく、11ドル台以下で推移し、引続き米国の消費減退もあって下げ基調が顕著になった、③国内的には業務筋での売れ口の悪さは依然続いたが円高還元セール等の動きも活発になっていることもあって、末端消費は安値の浸透もありそれなりの消化で、年末には、量販、業務筋とも好調な数字を残した、④その結果、家計消費も単価の下げもあり、特売も多く本年も引続き数量が前年を上回り、金額ベースでは前年並みであった、④様々な状況の中で、在庫量の減少が目立っており、消費の減退が止まれば、来年度以降はやや期待が持てる状況になりつつある、ことなどである。